

43160
教科書文庫

5
8/0
34-1947
01304
49575

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

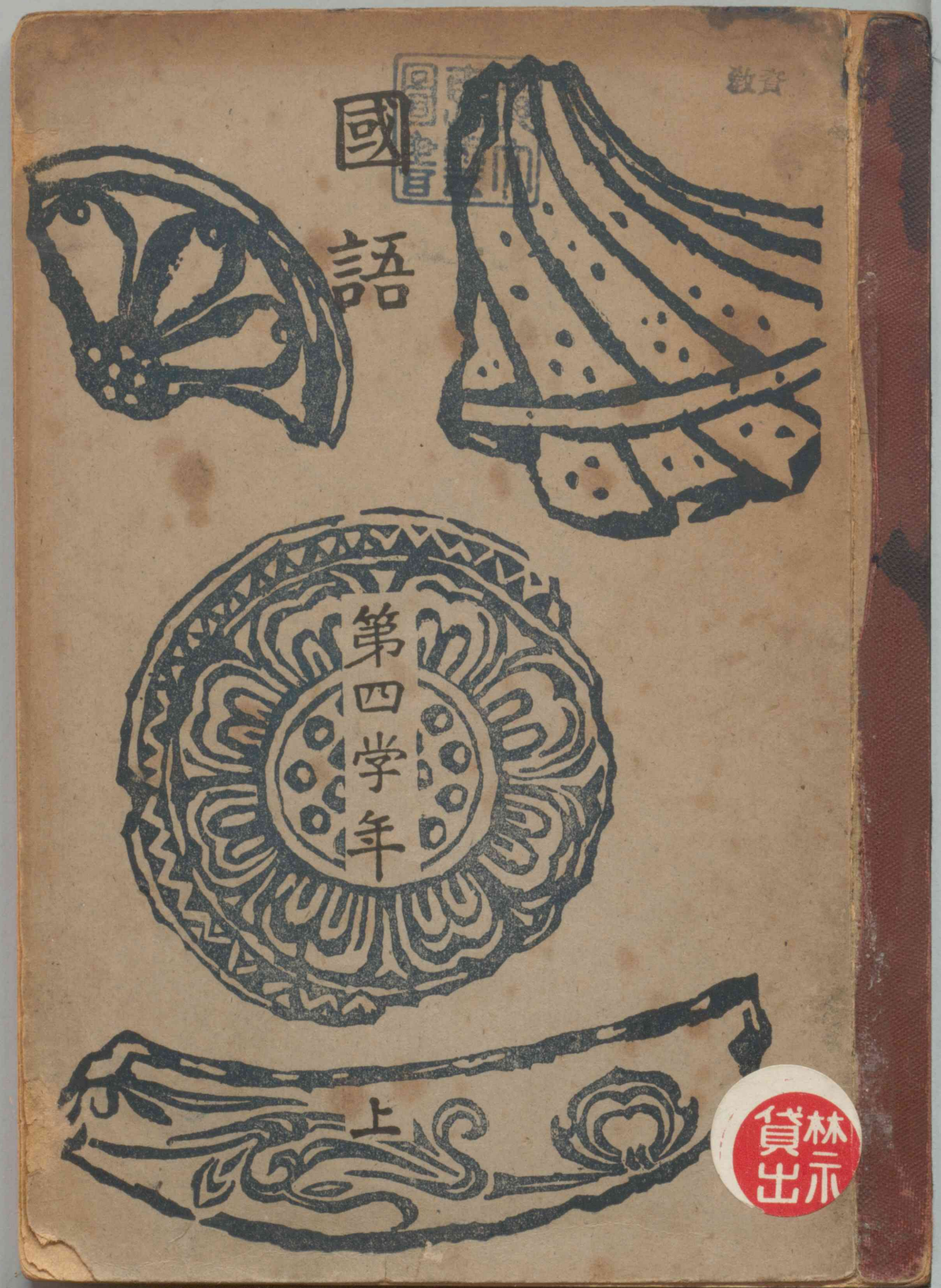
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



國語

第四学年

林示
貸出

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
Tajima JAPAN

教育

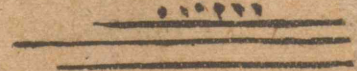
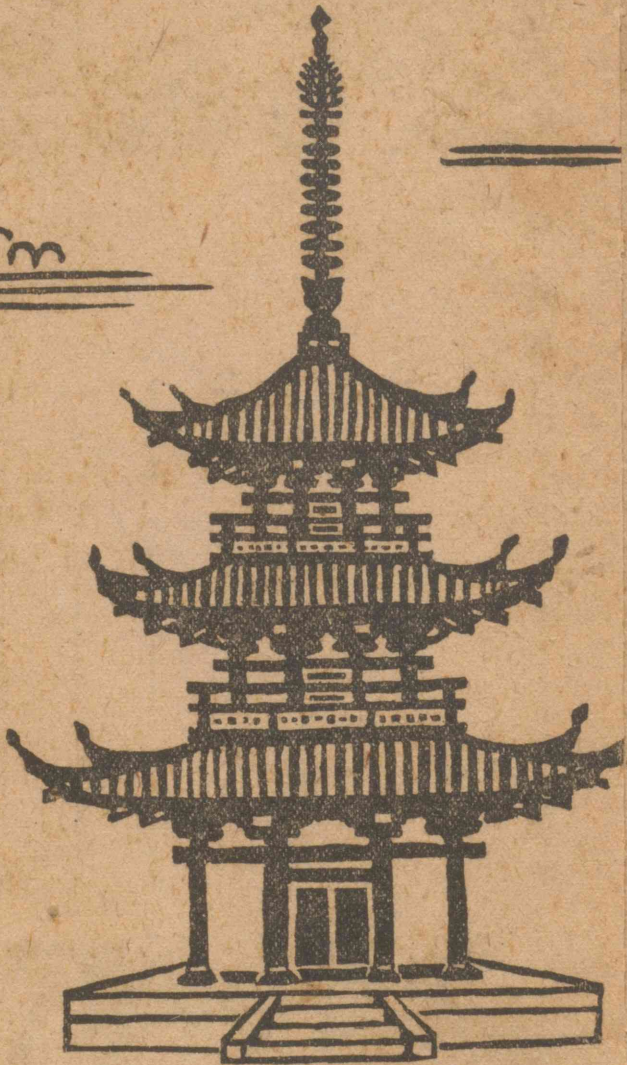
國

語



第四学年

上



中央図書館

広島大学図書

0130449575





もくろく

一 校門のかしの木 四

二 手ということば 十一

三 もんしちちよう 十六

(二)

(三)

(三)

(四)

(五)

四 汽車の中 三十四



五 作文 四十七

(二)

(三)

(二)

(三)

(三)

六 月明かり 六十九

七 にげたらくだ 七十四

一の場面

二の場面

八 うさぎ日記 八十六



一 校門のかしの木



夜明けの風が流れてくる。中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼうっとあらわれる。どこかで小鳥が鳴いた。チチ、チチ、ピークイ、ピークイ、チチ、チチ、教室のまどは、まだねむりがふかい。

校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

「さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

「あの白いブラウスの女の子かな。かばんをカチャカチャ鳴らして、走ってくる男の子かな。」

朝日の光がななめにさしてきた。校舎の半分が光った。校庭のつゆもいっぺんに光った。白いちやうが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきえた。きたきた。やっぱりあの男の子だった。きょうは、ぼうしをかぶっているな。赤い運動ぼうだ。

かばんをカチャカチャ鳴らして、げたばこのかげにかくれた。つきからつきへと、子どもたちがやってくる。学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。

昭和二十二年

あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。わらい声は
はじける。オルガンがひびく。

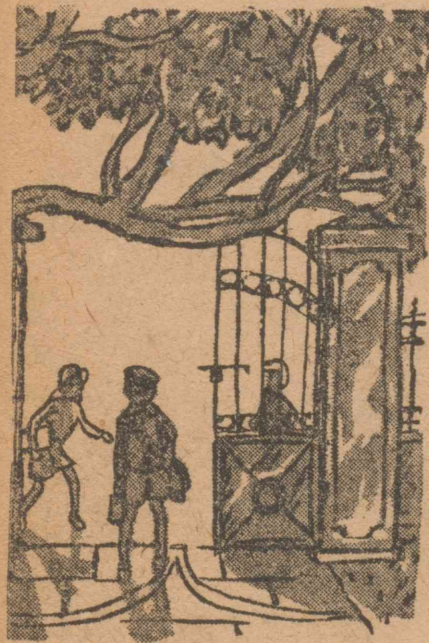
カラン、カラン、カラン。おけいこがはじまった。

「はい。」「はい。」「はい。」

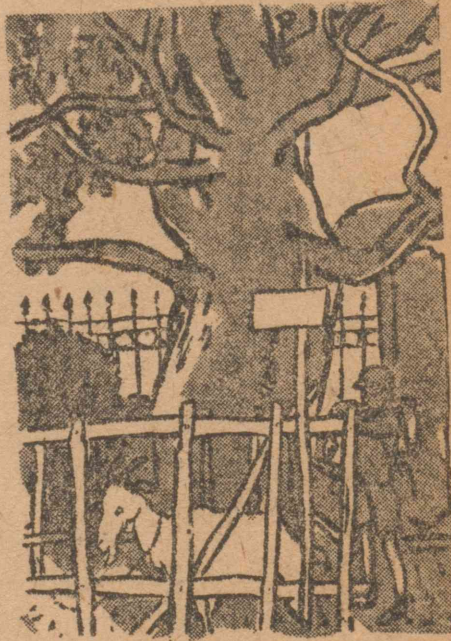
「先生。」「先生。」

えんどうの花が、風もない
のにゆれている。

「もう帰る子がある。一年生
だ。手をつないで校門をて



ていく子ども、かたを組ん
で話しながらでていく子ど
も、ならったばかりの唱歌
を、大きな声で歌っていく
子ども、なんども手をふり
ながら、先生にさようなら
をして走って帰る子ども。



一どでいいから、風になりたい。風になったら、学校の中
を、ちょっとひとまわりするのだ。ろうかをすうっと通っ
てみたり、かいだんをトントンあがってみたり、こうどう
をのぞいてみたり、みんなが勉強する教室にはいって、こ

しかけてみたり——」

かしの木は、きょうもそんなことを考えた。

そうじがはじまった。渡りろうかをとおる足音がきこえる。バケツの音もする。水の音もする。学校のおいがしてくる。しおがひくように、子どもたちが、さっと、学校からいなくなってしまうた。教室のまどは、どこもまぶたをとじる。すずめが、ときどき チュンチュンと鳴く。その声が校庭にひびきわたる。

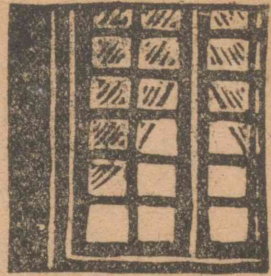
やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。

しゆくちよく室にひがともった。白いカーテンが黄色くみえる。そこからラジオがきこえてくる。

星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。「わたしをうえてくれた卒業生たちは、どこにどうしているだろう。もう、四十五年にもなる。あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。アラビアンナイトのように、いろいろな話がある。春には春の話、秋には秋のものがたり。なん百人の子ども、顔、なん千人の子どもの心。毎年、新しく入学した子どもたちが、わたしのそばへやってきた。毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそばからさっていった。」

おぼろ月が空にかかっている。さくらの花が、白くうかん

でみえる。



「渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こっ
ちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。
渡し終ると、またひき返して、新しい子ど
もを乗せ、向こう岸へ運ぶ。先生のおしご

とは、渡しもりのようなものだ。」

しゆくちよく室のひがきえた。夜つゆがおりてきた。

かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなつた葉をふ
るわせ、それから、ねむりにおちていった。

二 手ということば



「手がよごれていますよ。」

「手がつけられません。」

「手がたりない。」

同じ「手」ということばにも、いろいろなつかい

かたがあります。

じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をた
たきます。

このときの「手」は、てのひらをさしています。「手をうつ」の「手」
も、「手をあわせる」の「手」も、これと同じつかいかたです。

ところが、「かごの手とか」「なべの手となると、人の手では
ありません。これは、持つところということになります。

また、「あさがおに手をやりましょう。」とい
うときの手は、またすこしちがいます。これ
は、あさがおのだしている手のことではあり
ません。あさがおのつるがまきつくように立
ててある、竹や木のことをいうのです。

「きゅうりの手や豆の手なども、同じです。

「手ならいをはじめましょう。」

「だいぶ手があがった。」

このときの「手」は、文字を書くことをさしていますが、どう

して、「手」ということばが、文字を書くことになってきたので
しょう。

「手をつくす。」

「いますこし、手をいれてみよう。」

「新しく手をつけた。」

このようなときの「手」は、どんないみにつかわれているので
しょう。

それとよくにたつかいかたで、「まいの手」といたり、「この
手でやってみよう。」とかいたりします。

私どもの手が、さまざまはたらきをするように、「手とい
うことばも、さまざまはたらきをしてくれます。

つぎの「手」は、どんなつかいかたでしようか。

ゆく手に、まつの木が立っています。」

すばらしいものを手にいれたね。」

「そんなに、手をやかせるな。」

「ちよつと、手にあまるしごとだな。」

「手にとるようによくわかる。」

同じことばで、ちがったつかいかたがあるのは、「手だけで

はありません。」

「腹がいたみだした。」

「腹をたてるな。」

「腹に思っていることと、いうこととが、ちがう人がある。」

「腹をかかえてわらった。」

「腹のすわった人だな。」

これは、「腹」ということばを、いろいろにつかたばあいを、しめしたものです。

「ほなが高い。」「ほなをならす。」

「口をだすな。」「口ごたえする。」

「ほがゆい。」「ほがたたない。」

私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろいではありませんか。

三 もんしろちよう

(一)

「ちようちよ、ちようちよ、なの葉にとまれ。の音楽が、ひびいてくる。」

学校の運動場に、子どもたちが集まっている。

子ども「先生、早くでかけましよう。」

先生「じゃあ、でかけよう。はん長は、めいめいのはんのにんずをかぞえたかね。」

はん長「はい。はい、しらべました。」

はん長「先生、きょうは風がありませんから、ちようちよが、

たくさんとんでいるでしょう。」

先生「よくおぼえていたね。風のない日は、ちようちよがよくでるのだったね。さあ、出発しよう。」

「ちようちよ、ちようちよ、なの葉にとまれ。」の唱歌が、きこえてくる。

(二)

女の子一「このまえより、なの花がへっているわ。」

女の子二「そうね。」

女の子一「なぜかしら。」

女の子三「花がちって、実がつきはじめたからでしょう。」



女の子四 「先生 この実はなにに

するんですか。」

先生 「そんなに実をとっちゃ

いけない。よくみのつ

てから、油をとるんだ

からね。てんぷらは

これであげるんだ。」

女の子一 「あら そうですか。」

男の子二 「ああ、とんでる、とん

でる。きょうは、ずい

ぶんとんでるなあ。」

先生 「あぶないよ。川に落ちないように。」

男の子三 「このまえきたときは、風が強かったから、ちようちよ

がでなかつたんですね。」

女の子二 「それに寒かったし。」

男の子一 「先生、風の日は、ちようちよは、どこにかくれている

んですか。」

先生 「しげった草むらの中に、かくれているのさ。」

子どもたちは、小さな橋を渡る。

男の子四 「先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけです

か。」

先生 「知っている人——」

子ども「はい。はい。」

先生「きしもとくん。」

きしもと「はいこんばたけです。」

先生「そうだ。よく知っているね。」

きしもと「私のうちでは、だいこんを、庭に二十本うえたんです。そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきましたら、それが、いまちようと、こんな白い花をつけています。」

先生「それで知っているんだね。」

女の子三「あつ、白いちようちよがとんできた。」

男の子三「白いちようちよが、白い花にとまった。」

男の子四「あつ、こっちにも。」

女の子四「あっちにも。」

先生「どまっているちようちよが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん、ひとりびとり、ばらばらにわかれて、そつとね。」

子ども「はい。」

(三)

きしもとくんの家。きしもとくんが、弟のはるおくと、ふたりで、本をよんでいる。日曜日のはれた朝、はるお「にいちゃん。また、すずめがおりにきたよ。」

兄 「しずかにして、みていてごらん。」

すずめは、びよんびよんとんで、庭のはたけの中を歩く。

兄 「すずめが、だいこんの葉をみているよ。」

ささやくように、

はるお 「にいちちゃん、すずめはなにしにくるの。」

すずめが、ぱつと、とんでにげる。

兄 「はるお、あまり大きな声をたすから、にげちゃったよ。」

はるお 「ねえ、にいちちゃん、なにしにくるの。」

兄 「あおむしをさがしにくるのさ。」

はるお 「あおむしをとって、どうするの。」

兄 「すずめにやるのさ。」

はるお 「すずめ、あおむしをたべるの。」

兄 「だいすきさ。」

そのとき、おかあさんがおいでになる。

母 「なにしてるの。おさらいを早くすませてから、お遊び

なさい。」

兄 「おかあさん、あおむしのことを、話していたんですよ。」

母 「そう、それも勉強ですわね。あなたは、きょう、しい

くびんのなっぱを、とりかえましたか。」

兄 「あ、わすれていた。もう、おさらいがすんだから、あ

おむしのせわをしよう。はるお、だいこんの葉をいま

いどってきてね。ぼくは、びんの中をそうじして、砂

に水をやるから。

はるおは、だいこんの葉をとってくる。兄は、しいくびんの中の砂に水をやる。

はるお「はい、だいこんの葉——どうして、葉を砂の中に立てるの。」

兄「かれないようにさ。」

はるお「感心したように、ふうん。」

兄「さあ、あおむしくん、新しいごちそうだ。」

兄は、ニセンチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。

兄「ねえ、おかあさん。先生も、あおむしをかっていらっ

しゃるって。」

母「あおむし、大きくなりましたね。たまごをとってしらべてから、なん日ほどたっているかしら。」

兄「ちよつとまってください。日記帳をみますから。」

日記帳をみながら、

兄「たまごから小さい虫になるのに、七日かかっています。それから十日すぎて、からだか黒っぽかったのが、青くかわってきたんですよ。」

母「ほっばと同じ色になったのね。どうして、ほっばと同じ色になるのか、わかりますか。」

兄「どうしてかしら。」

はるお 「にいちゃん、わからないのかい。」

兄 「なまいきいうな。はるお。」

母 「これこれ、そんなこと。ねえ、はっばと同じになるの

は、鳥などに、すぐみつからないためですよ。

兄 「あ、そうか。」

(四)

それから、いく日かたったある日の午後。

はるお 「にいちゃん、にいちゃん。」

兄 「どうしたのさ。」

はるお 「あおむしが、へんな色にかわっている。」

兄 「ほんとうだ。おかあさん、黄色になっちゃった。」

母 「さなぎになったのですよ。先生は、あおむしがさなぎ

になるって、教えてくださらなかったの。」

兄 「いいえ、どうなるか、みんな自分でしらべるようにと、

おっしゃっただけです。」

母 「先生は、いいことをおっしゃいましたね。なんでも、

自分でみつけていきましたよ。」

はるお さなぎをふしぎそうにみながら、「これ、死んでいるの。」

母 「いいえ、生きていますよ。これから、どうかわるてしよ

うね。」

兄 「観察日記に、さっそく、これを写生しておこう。」

きしもとくんが学校から帰ってくる。

兄 「おかあさん、ただいま。はるおは。」

母 「はるおは、さっきから、おもてて遊んでいますよ。」

兄 「おかあさん。」

母 「」

兄 「きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。」

母 「どうして。」

兄 「あおむしがさなぎになったところを書いたのが、よくできたって。」

母 「それはよかったね。どんなふうにしたの。」

兄 「よんでみましょうか。」

母 「よんでちょうだい。」

兄 「自轉車のチューブのようにふわふわした、黒っぽい、
かわいいあおむしは、だいこんのはっぱと同じ色にか
わっていた。それは、すずめたちにたべられないため
だと、おかあさんが教えてくださった。ぼくは、あお
むしは、かくれみのをきているようなものだと思った。
ぼくは、学校から帰ると、だいこんのはっぱを、とり
かえてやるのが楽しんだ。きのう、学校から帰ってみ
ると、あおむしは、もう黄色なさなぎにかわっていた。

弟が、ぼくよりさきに それをみつけた。

そこへ、はるおが帰ってくる。

はるお「にいちゃん、帰っていたの。まだかと思った。」

母「いま、いさんに日記をよんでもらっていたところよ

きよう、先生にほめられたんですって。」

はるお「いいな、にいちゃん。」

兄「さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。」

立ちあがりながら、なにげなく、しいくびんをみる。

兄「おやっ、おかあさん、おかあさん。」

大きな声をたてる。

母「どうしたんです。そんな大きな声をだしたりして。」

はるお「にいちゃん、な

あに。」

兄「ちょうになった、

ちょうになった。」

はるお「ほんとうだね、

にいちゃん。」

母「まあ、まあ。」

しずかな音楽がはじまる。

母「白いえのぐにみどりをとかしたような、美しい羽です

こと。」

兄「あの羽をしぼったら、きれいなしるがでそうね。」



母 「おかあさんも、こんなところをみるのは、はじめてで

すよ。もんしろちょうのおたんじょうね。」

兄 「羽をふるわせている。」

母 「空氣にふれて、すこしずつのびるのね。」

なごやかな音楽がつづく。はるお、おかしな声で、

はるお 「おや、ひげをはやしてる。」

兄 「ほんとう——ひげだね。」

はるお 「あかんぼのくせに、ひげなんか。」

兄 「ほんとうにきれいなね、おかあさん、花よりきれいなね。」

はるお 「ふしぎだな。あんなあおむしが。」

兄 「おかあさん、死ぬといけないから、ここからだして、

庭のたいこんの葉に、うつしてやりましょうね。」

母 「それがいいわ。」

はるお 「にいちちゃん、早くいこう。」

兄 「きつと、とびだすよ。さあ、はるお、おいで。」

兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちょうちよを、しい

くびんからとりだす。庭には、日光が降りそそいでいる。

母は、ふたりの兄弟をながめている。

明かるい音楽。

四 汽車の中

(一)

汽車の中は、人でいっぱいでした。
もうすこし、中へはいれませんか。
「そんなにおしたって、だめですよ。」
むりにわりこもうとする男の人もあり、足をふまれて、おこっている女の人もありました。
私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動くことさえできません。

私は、さぶろうの手をしっかりとにぎり、さぶろうは、私の中からだにすがりついていました。それでも、汽車がゆれるたびに、前後からおされて、さぶろうは、だんだん頭を私によせ、おしまいには、私とさぶろうとは、まるで、一つからだになってしまいかど、思われるほどでした。

私は、ありったけの力をだして、さぶろうをかばうように両手をつっぱりました。

家をでるとき、おかあさんに、

「だいじょうぶです。おばさんのうちへは、もう二どもいったことがあるのですもの。それに、乗りかえもないし、二時間ほどでつくのですから。」
とうけあって、さぶろうをつれてきたのでした。

「もうすこし、中へ入れてくださいませんか」
「だめだよ。とてもはいれないね。」

私は、ほんとうに困ってしまいました。

「さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらっしやい。」

私はそういって、どうぞぶじにつきますようにと、心の中
でいのっていました。

「ここに子どもがいる。かわいいそうだ。」

頭の上で声がしました。すぐうしろのおばさんも、

「どうかして、中へ入れてやれませんかしら。」

と、心配そうにいました。

すると、なんだか、まわりがすこしゆるやかにになり、から

だがらくになったような気がしました。私は、さぶろうのか
たに手をかけて、

「さぶろうさん、だいじょうぶ。」

ときいてみました。人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは

元氣よくにこっと、私をみあげました。

だけれが、

「頭はどうきょう、足はおおさか。」

といったので、みんながわっとわらいました。

そのとき、ふと上を向くと、私のよこのわかい男の人が
ただひとり、わらいもせず、両方の手でまどわくをおして
います。私たちのために、せいっぱいの力で、すきまをこ

しらえてくれていたのです。私は、思わず、

「どうもありがとうございます。」

と、頭をさげました。

「さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしゃい。」

うしろのおばさんがいつてくれましたので、私は、人と人

のあいだをかきわけていこうと

しました。しかし、弟の手をひいて

いるので、ひとあしすすむにも、

よいいではありません。

そのとき、そのわかい男の人が、

「さあ、リレーにしよう。」



と、いったかと思うと、いきなりさ

ぶろうをだきあげ、となりのおじ

さんの目のまえへ、つきだしまし

た。おじさんは、わらいながらさ

ぶろうを受けとって、つぎの人に

渡しました。それから、つぎから

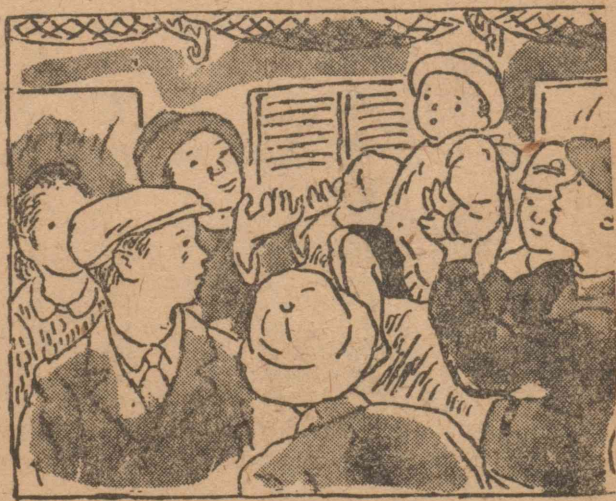
つぎへ、「よいしょ。」「よしきた。」そ

れつ。」と、送ってくれました。

はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方を

みていましたが、三人め、四人めと、高いところをメデシン

ボールのように送られていくうちに、ここにこ顔になり、と



うとう、うれしそうちに、声をたててわらいました。

乗客は、高いところを渡っていくさぶろうを、おもしろそ
うに、みおくっていました。

私は、いそいで、さぶろうのあとを追いかけました。

さぶろうは、だれかにゆずってもらった座席の上に立って、
「ねえさん、こっち。」

と、私を手まねきしています。

私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心
の中でお礼をいいました。

(二)

私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹ま
でふりまかれて、ちょうど、かふんにまみれたみつばちのよ
うになって、汽車でねむっていた。

ふいに、はくしゅがおこった。目をさますと、向こうの席
にひとりの青年が立っていた。かれは、むねに、大きなぴか
ぴかしたアコーデオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。
汽車は、かなり早く走っているので、青年のからだはゆれて
いたが、ひく手にくるいはなかった。かるやかなしらべは、
朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。

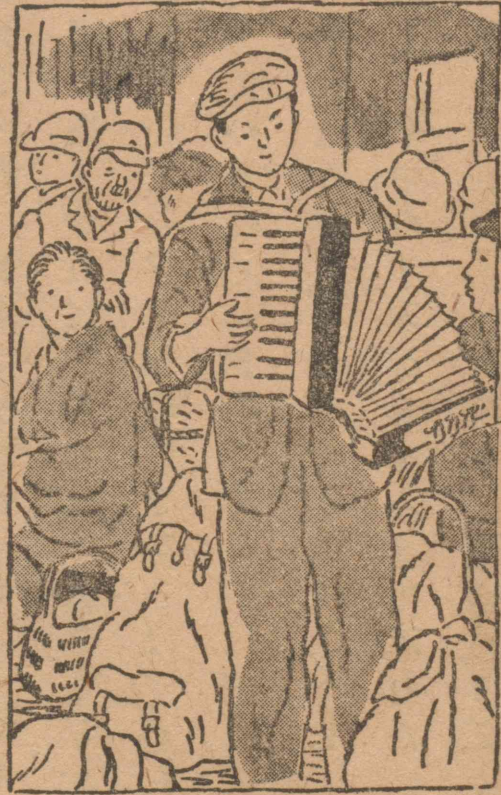
青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。ごく
ありふれた曲であったが、旅をしてきた私には、しみじみと

きかれた。

汽車はトンネルに
はいった。しかし、
青年は、ひく手をや
めないうで、いっしん
にひきつづけていた。
トンネルをでたと
き、向こうの席で、

「みなさん。」

と、大きな声をだした人があった。みると、しらがの老人で
ある。



「みなさん、たいへんさしでがましいことですが、わたしに
ちよっと話をさせてください。」

車中の人たちは、みんなこの老人をみた。

「わたしは、終戦後、いつも心さびしい旅をしていました。
けれども、きょうは、楽しい旅行をしております。どこの
どなたかはぞんじませんが、楽しい音楽をきかせてくださ
る心持を、ほんとうにありがとうございます。はなはだです
ぎたことかもしれません。このかんしゃの氣持を、あら
わしたいとぞんじます。みなさん、いかがでしょう。」

はくしゅが四方からおこった。
そこで、老人は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの人

の手に渡した。ぼうしは、つきつきと人々の手を渡り、お金がその中にたまった。私のまえにもぼうしがきた。私も喜んで、いくらかのお金をそれにくわえた。

車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたたび、しらがの老人のところにもどった。老人は、

「ごあいさつをします。」

と、いって、青年のまえにすすみでた。

「たいへん失礼だと思えますが、これは、車中の人たちのところぎしであります。お受けとりください。」

青年はにっこりわらった。

「みなさん、ありがとうございます。」

ここで、ちよつとことばを切った。

でも、わたしは、こんなことになるうとは、思っています。んでした。また、こんなつもりでひいたのでもありません。ただ、たいくつまぎれにひいたのです。せっかくのおこころぎしですが、このお金はいただきかねます。

そういってから、老人にぼうしを返した。それから、二三日のおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。

おしまい、青年は、大きな声で、

「では、ありがたくいただきます。」

と、いって、おじぎをした。

「それでは、お礼にわたしのいちばんとくいな曲を、一曲ひ

きましよう。

これをきいて、みんなは、またはくしゅをした。青年は、アコーデオンを、両手でぐっとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。名高いオペラの序曲である。

私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。黄みがかつた麦ばたけ、縣道らしい白っぽい道、そこを自轉車に乗って走る中学生、たがやしている父と子、きりの花——曲は終わった。ちようど、汽車もとまった。青年は、すわって、アコーデオンを黒ぬりのケースにおさめた。

駅は、東北本線の「はなはずみ」であった。駅の名も美しくよまれた。

五 作文

(一)

思っていることを、はっきり書きあらわそうとすると、文章が、だんだんくわしくなっていくきます。



どころまでは、なかなか、いきつくものではありません。

文章は、心の鏡のようなものです。心がはっきりとしていきますと、文章も、だんだんはっきりします。心がくもっていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。

つぎに、「ドッジボール大会」という文章が二へんあります。はじめに書いたのと、二回めに書いたのとをくらべてごらんなさい。二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人にはつきりと、そのようすがわかります。

ドッジボール大会

六日の日、郡ぜんたいのドッジボール大会があった。

ぼくも、せんしゅになって、いっしょうけんめいにやった。



はじめに、ひがし村の学校とやった。ぼくのほうは、セ

ンターが外野へでてしまったので、あいてのセンターが

「勝つ、勝つ。」

とさわいだ。

それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、

ぼくたちのほうが勝ってしまった。

第二回めには、にし村の学校としあいをした。これも勝った。

さいごに、町の学校とやることになった。あぶなかったが、わずかのちがいで勝った。

ぼくは、うれしさをいっぱいになった。

ドッジボール大会



いよいよ、ドッジボール大会がはじまった。
どの学校のせんしゅも、みんな運動場に整
列して、式をあげた。

はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校と
が、しあいをする事になった。ぼくたちは、コートへで
ていった。

たかやま先生が、

「しっかりやれ。」

と、元氣づけてくださった。

「ピー。」と、用意のふえが鳴った。

しんぱんの先生が、

「じゃんけんをして、いいほうのボールをつかいなさい。」

といわれた。

ぼくらのほうのボールをつかう事になった。ふえがま
た「ピー。」と鳴って、しあいがはじまった。ぼくらのほうが
とんとんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。
ぼくもあてられた。

ひがし村の学校のセンターが、喜んで、

「勝つ、勝つ。」

とさげんだ。ぼくは氣が氣ではない。みかたのおうえんだ
んが、「ブレイ、フレ！」と、大声をたてる。のこったもの

がふんとうした。やがて、「ピー」と、ふえがひびいた。思いがけなく、ぼくたちの勝となった。

「場所こうたい。」

しんぱんの先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。すぐまた、しあいがはじまった。むちゅうでやっていると、「ピー」と鳴った。どちらが勝ったかと思つて、心配している。十一たい十で、ぼくらのほうが勝つた。

うれしいような、すまないような氣持がした。

第二回めは、にし村の学校とやることになった。このときは、ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあたつて、ちよつとのあいだに、勝つことができた。

こんどは、さいごの決勝戦だ。あいては、町の、いちばん強い学校だ。

たかやま先生が、

「さあ、こんどがだいじだ。みんな元氣でやるんだ。」

と、はげましてくださった。

なんだか、向ここのせんしゅは、大きくて強そうだ。

「ピー」はじまった。

「しっかりやれ。」

おうえんの声が耳にひびいてくる。

センターが、外野のセンターにれんらくをとつて、どんだん、あてにあてた。あいてのセンターは、ぼくをねらつ

た。ボールがビュッととんできた。ぼくは、しっかり受けとめて、すぐセンターに渡した。ボールは、すばやくあちこちにとんだ。そのたびに、「ワアッ」という声がおこった。ふいに、ボールが、ぼくのところにとんできた。ぼくはよこだきに受けとめた。あぶなくころびそうになった。「ピー」はくしゅがおこった。ぼくたちの勝である。みんな、また運動場に集まって、終りの式をした。ぼくは、うれしくて、胸がときどきしていた。式をすませてもどつてくると、たかやま先生も組の友たちも、みんなにこにこしていた。

(二)



しかし、文章は、くわしくしさえすれば、はっきり写しだすことができるとはかぎりません。そのはんたいに、ふてをいれるほど、かえって、文章がみじかくなっていくことがあります。

心にはっきりとえがかれた一つのかたちは、まじりけのない宝石のようなものでありますから、よけいなことばは、ちりほどもあってはなりません。

○
五年生が、運動場で、たいそうをしています。

一年生の唱歌がきこえてきます。

○ つばきの花がまっかにさいています。
根もとに、ぽたぽた落ちています。

○ 海がみえます。

○ 家と家とのあいだに、ほそ長く光っています。

○ 明がるい月夜です。

○ そこらで、虫が鳴いています。

○ つむじ風が、わたしのまえを走っていく。
紙が、くるくるまいをしてとんでいる。

○ ろうかを曲がったら、
ふっと、風がふいてきた。

○ おかあさんの鏡
庭のはっぱがうつっている。

○ ぼたるを三びき、つかまえました。



雨がはれて、にじが大きくなってました。

○ たんぼの上で、つばめがちゅう返りをした。

○ あさがおの花が、ラジオの音楽をきいています。

○ ほそい雲が、ますますほそくなる。

○ おかあさん、いま、柱時計がとまりました。

○ 黄色いやまぶきの花に、黄色いちょうがとまっています。

こんなのは、みじかくなった文ですが、まだ、みがきあげられたことばということにはできません。つぎのはどうでしょう。

○ なにかの花びらが、

くもの巣にかかってゆれている。

○ 土の上、一センチほどのところで、

○ ボタンと音がして、

まりが、そこからとびこんできた



よっちゃんたちの話し声がする。

○ 考え考え歩きまわるような、

大きなあり。

スリッパのへりをひとまわりして、
帰っていった。

○ よく落ちるかきの実。

いまに、一つもなくなるだろう。

○ またしても、ポトンと音がする。



さきだけみえることし竹が、

ざわざわと、動いている。

うす黒い雲は、どこかへ行ってしまったのに。

○ まよったせみが、かきの木につきあたって、

パタパタやって、にげていった。

○ ひとところで、からすが鳴くと、

あっちでもこっちでも鳴く。

○ こんなに、からすがいるのかしら。



すみをすっている。めじろの声がきこえている。

○ 雨が降る。風がふく。さくらの木が、ぬれてゆれている。

○ 四年生の楽しさよ。さくらの花をしらべてみたり——



○ どの花も、みんな空を向いている。日がてっている。

○ なの花ちらほらさきはじめ。うすぐもり。

○ 小さな虫がかたまって、顔のところとんでいるくれがた。

○ ぱくちく花火が、パンパン、もうくらくらくなっている。

○ 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなった豆のつる。



○ 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、ふきぬける。

○ しずかに波がよせている。みんな、おべんとうをたべている。

○ ふえの音、虫の声、三日月さん。

○ 毎日書いてきたあさがお日記。はつ花のさいたこと、けさ書く。

○ いつのまにか、葉ばかりのさくらになって、毎日ほれ。

○ 波の音がきこえている。子どもの声がきこえている。

○ あっちでもこっちでも、だっこく機、麦のとりいれ、日
がてりつける

○ どんどん、どんどん、うえていく、みんなそろって、う
えていく。

○ もやのかかったおきの島、ボンボン船がでかけていく。

○ 雨あがりの麦のほ 子どもと子どもとかけていく。

○ もみじがまっかて、山のいもをほっている人が二三人。

○ ふろからみてる十三夜さん。雲一つうかんでいる。

○ 青々とはれて、すすきすこしゆれている。

○ うら山に、みかんを持って遊びにきている。よい天気。

うめがさく。方々のうちで、ふとんほしてある。

○ 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになっている。

(三)



人の顔をちようこくするのに、

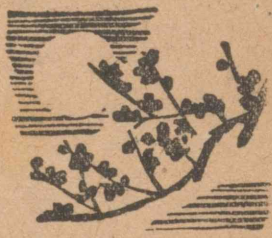
二つのやりかたがあります。

一つは、はじめ骨組みをこしらえておいて、それにねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、その人の顔ににせていくやりかたです。

もう一つは、だいらせきや木材をけずっていった、だんだん、その人の顔ににせていくやりかたであります。

まえのやりかたは、ちょうど、文章をくわしく書きたすのににっています。あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

やりかたはいろいろですが、ねらいどころは一つです。心に思ったことを、はっきりと写しだすということなのです。



たっぷりと

春は

小さな川にまで

あふれている

あふれている。

六 月明かり



くれがたの庭そうじ、
それがすむのをまっていたのか、
すぐうしろに、
月は、音もなく、のっそりとでていた。



もやが深いから、
遠いような、
近いような、
月明かりだ。
なんの木の花だろう。

にわか雨は、
ぐっしよりとぬらした。
うまもうまかたも、同じように。



ぬまの上を、にわか雨が通る。
そのずっと高いところでは、
ひばりが一つ、さえずっている。





うまよ

そんな大きななりをして

子どものように

からだまであらってもらっているのか。

あ、ほたるだ。



だあれもない。

うまが。

水のおいを

かいている。



ぼさぼさのいけがきの上である。

ぼたんでもさいているのかと思ったら、

まあ、子どもが

わらっていたんだよ。



みんな。

集まれ、
集まれ。

そうして、ぐるりとわをかけ。
いま まっぶたつになるすいかだ。

七 にげたらくだ

一の場面

入 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。

ところ さばくの中。

甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら、なにか、ものをさがして歩いてくる。

甲 どこへいったのだらうね。

乙 「ちよつとのまに、いなくなってしまった。さて、どこへいったものかしら。」

ふたりそろって、遠くをみまわす。

甲 砂のほかに、なにもみえない。

乙 「木一本もみえない。」

そこへ、ひとりの旅人がやってくる。

旅人「もし、もし。」

甲乙が、いっしょにふり返って、

甲 乙「はいはい。なんですか。」

旅人「あなたがたは、なにかさがしておいでのようなだが。」

甲 「そうです。」

乙 「さきほどから、さがしつづけているのですが。」

旅人 「もしや、あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらっしやるのではありませんか。」

ふたりは、びっくりした顔で、

甲 乙 「そうです。そうです。」

旅人は、おちついたことばつきで、

旅人 「そのらくたは、かた目ではありませんか。」

ふたりは、なおびっくりして、

甲 「まったくそのとおりです。」

乙 「かた目なんですすよ。」

旅人は、思いだすようなふうをして、

旅人 「そうして、左の足が一本短くて——それから——」

といつてから、ちよつと考える。

このようすを、甲乙ふたりがみてとって、なにか、こそこそささやきあう。

旅人 「そうそう、そのらくたは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。」

ふたりは、いよいよびっくりして、

乙 「それにちがいません。」

甲 「どこでみましたか。」

旅人は、それには答えないうで、また思いだしながら、

旅人「それから、つけた荷がありましたね。」

甲乙「ありました。」

旅人「その荷は麦でしょう。」

甲「たしかに、たしかにそうです。」

乙「どこにいるか、早く教えてください。」

旅人「いや、わたしは、そのらくだをみたのではありません。」

甲「え、でも、そんなにしくしくござんじではありませんか。」

乙「それとも、だれかにおききになったのですか。」

旅人「いいえ、みたのでも、きいたのでもありません。」

ふたりは、また顔をみあわせていたが、

甲「どうもおかしい。あなたは、そのらくだを、どこかへ

つれていったのに、そういない。」

旅人はおどろく。

乙「あやしい。さあ、けいさつしよへ、いっしよにいつて

もらおう。」

旅人「そんな。」

甲乙「いや、あちらで、あかしをたててもらおう。」

ふたりは、旅人の両手をとる。むりにつれていく。

二の場面

人 旅人、甲乙、裁判官、

ところ 法廷。

旅人と甲乙が、ならんでいる。裁判官がはいつてくる。

裁判官 「いったい、どういうことなのか、くわしく話さない。」

甲 「私どもは、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通つていきました。どちゅうでひと休みしているうちに、つい、ねむってしまいました。」

裁判官 「それで、どうした。」

乙 「目がさめてみると、らくだがいませぬ。おどろいて、方々をさがして歩きましたが、みあたりませぬ。そのとき、この人にてあったのです。」

裁判官 「それから。」

甲 「すると、向こうから、らくだをにがしたのではないか。」

と、たずねるのでございます。

乙 「それに、もっとあやしいことは、この人は、私どもらくだのことについて、それはよく知っております。」

裁判官 「どんなことを、知っているのかね。」

乙 「だいいち、らくだがかた目であることを知っていました。そのとおり、私どものらくだは、かた目でございます。」

甲 「らくだがびっこであることも知っていました。しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです。」

裁判官 「ほかにまだ、知っていたかね。」

乙 「はい、知っていました。らくだのまえ歯が、二三本ぬ

けていることまで。」

甲 「そのうえ、つけていた荷物品の品まで、知っているじゃありませんか。」

甲 乙 「らくだをぬすんだのは、この男にちがいありません。」

どうぞ、おさばきをお願いします。」

裁判官 「ふたりのいうことは、よくわかった。」

旅人 をみて、

裁判官 「なにか、そちらにも、いibunがあるかね。もしあるなら、ここで、はっきりいうがいい。」

旅人 「はい、申しあげます。私がさばくを旅してきますと、砂の上にかくだの足あとがつついていました。それを

のに人の足あとがみえません。それで、このらくだはどこかからにげてきたのではないかと、思ったのです。なるほど。それから、そのらくだがかた目だということとは、どうしてわかったのかね。」

旅人 「それは、こうです。道のかたがわの草ばかりたべてあったからです。」

裁判官 「なるほど。して、びつこということは。」

旅人 「それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなっていきましたので。」

裁判官 「では、まえ歯のぬけているということ、なぜわかったのか。」

旅人「草をくいどったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。それで、齒が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。」

裁判官「きいてみれば、いちいち、もっともなことばかり。」

甲「もしもし、それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかったのでしょうか。」

乙「そうです。それが麦だということが、なぜわかったのでしょうか。裁判官どの、それを、しらべていただきとうございます。」

裁判官「それについて、なにか。」

旅人「それはほかでもありません。道に、麦がこぼれていたからです。」

裁判官「よしよし、よくわかった。らくだは、あなたがぬすんだのではない。もう帰ってもよろしい。」

旅人は、うれしそうに立ちあがる。裁判官は、ふたりのものに向かつて、

裁判官「あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。けれども、いまの答で、知っていたわけがはっきりしたでしょう。もう、うたがいははれたことと思う。早くいってらくだをさがしなさい。あまり遠くへいかないうちに。」

甲乙ふたり、いそいでたちさる。

ハ うさぎ日記

4月28日 (土) 晴 19度

私たちは、うさぎをかうことになりました。先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごに入れて持ってきていらっしゃいました。私たちで、めかたを計りました。

黒うさぎ 390g. 白うさぎ 400g. 茶うさぎ 1kg.

4月29日 (日) 晴 20度

草をやったら、3びきとも、せつせとたべました。

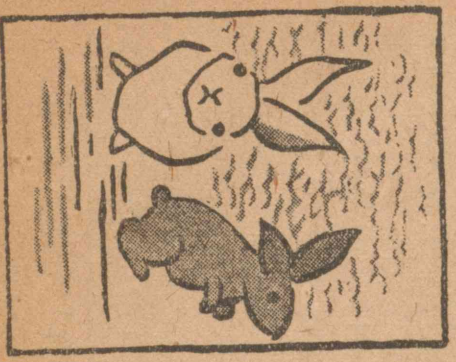
うさぎはどん草を、いちばん喜んでたべるか、しらべてみることにしました。きょうは、れんげそうとなたねの葉をやりました。

4月30日 (月) 晴 19度

うさぎは、すこしもじっとしていません。いつも、どこかを動かしています。

5月1日 (火) くもり 19度

うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべました。



5月5日 (土) 雨 15度

にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしていたべました。

5月6日 (日) 雨のち晴 15度

はこべとおおばこをやったら、にんじんをやったときのように、喜んでたべました。

5月20日 (日) くもり 18度

うさぎは、新しい草をいれてやると、そればかりたべて、まえにたべのこした古い草は、ふみつけるだけで、ちっとも

たべません。

5月22日 (火) くもり 16度

うさぎは、みんなで、13ぴきになりました。	茶うさぎ	1ぴき
うさぎをトびきもらいました。	白うさぎ	10ぴき
	黒うさぎ	2ぴき

5月28日 (月) 晴 23度

よく晴れた日には、とても元氣があります。うさぎでも、くもった日や雨降りの日は、きらいなのでしよう。

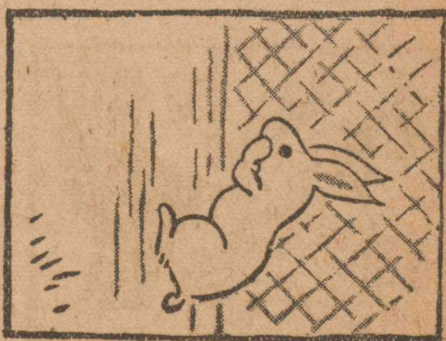
5月29日 (火) くもり 24度

よくみていたら、ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

5月31日 (木) 晴 28度

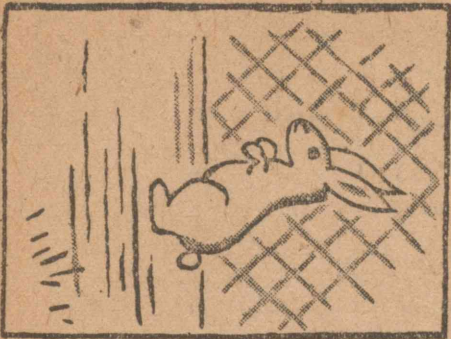
うさぎがうしろ足で立

ちました。が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。



6月25日 (月) 晴 27度

うさぎのふんを、水の中へいれてみたら



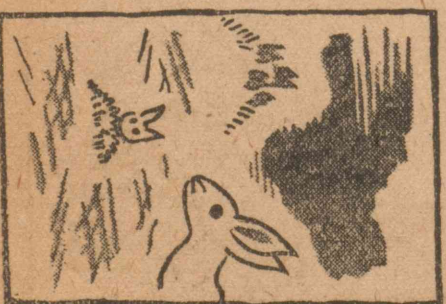
うきました。うさぎのふんはまんまるです。

6月28日 (木) 雨 28度

このごろは天気がわるいので、うさぎは、元気がありません。なるべく、こくろいをやるようにして、ぬれた草はやらなないように注意しています。

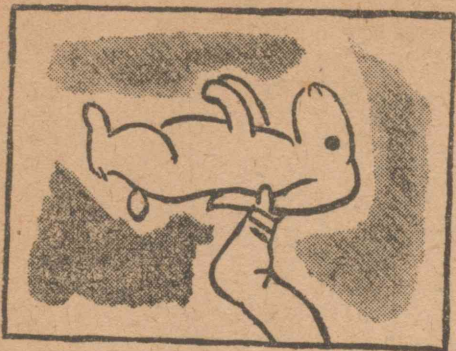
7月9日 (月) 晴 26度

私がいまをやってたら、白いうさぎは、早くたべたのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。



7月20日 (金) 雨のちくもり 22度

うさぎ小屋のそうじをしました。小屋からだすとき、みんな喜んですばりましたが、1匹きの白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへはいつてでてこないのて、小屋へ頭をいれて、だきあげて、そとへだしました。だすときに、わらを足でけつたりして、あばれました。



7月24日 (火) くもり 19度

うさぎの毛の長さを計ってみたら、白は2cm 黒も2cm、茶は1.5cmでした。そうじをしようと思って、首のところ

を持って、かごの中へいれたら、キューと、高く鳴きました。

8月2日 (木) くもりのち晴 29度

朝、いつてみたら、右から四ばんめのへやに、子うさぎが4ひき生まれていました。

8月4日 (土) くもり 25度

茶色のうさぎがはいつているへやに、えさがなかつたのて、かこいの鉄ぼうを、かじっていました。

子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

9月3日 (月) くもり 25度

けさ、白うさぎは耳にけがをしました。ほかのうさぎがかんだのです。しばらく動かないで、いたそうにしていきました。

9月6日 (木) くもりのち晴 29度

お晝に、うさぎのところへ行ってみたら、暑いのでねわってしまいました。あと足を長くのばして、まえ足を胸の下にいられています。



10月23日 (火) 雨 20度

うさぎのせなかをさかさになけると、毛がふわふわとびます。寒くなったので、むしろ戸をこしらえてやりました。



11月11日 (日) 晴 19度

けさ、行ってみたら、左がわのへやに、毛がたくさんぬけていました。よくみると、おくの方に、わらが巢のようにふくらんでいて、その中に、わたのようなふわふわした毛が、いっぱいはいってしまいました。その毛にくるまって、うさぎの子が7ひきいました。1ひきは白で、あとの6は黒っぽい色をしていました。

11月13日 (火) 晴 12度

7ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの中のものの中で元氣に動いています。1ひきのこらず、じょうぶに育てたいと思います。

11月22日 (木) くもり 17度

7ひきの子うさぎのうち、5ひきはねずみ色、1ひきは白、もう1ひきは黒でした。ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日めのきょう、みんな、目があき、からだには、すっかり毛がはえました。

11月25日 (日) 晴のちくもり 17度

白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。草のそばに来て、口をくっつけましたが、草はたべませんでした。

11月26日 (月) 晴 19度

ねずみ色の子うさぎが、きょうは、巣からでて歩いていました。そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。黒の子うさぎが、ちちをのうとして、親うさぎのちちにすがりつきますと、親うさぎは、足でけて、のませませんでした。うさぎは、人がみていると、ちちをのませた

くないのでしようか。

11月29日 (木) 雨 13度

朝早く行って見たら、子うさぎは巢の中でねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。お晝ごろ見たら、子うさぎは、7ひきとも、巢からでて歩いていました。

12月1日 (土) 晴 13度

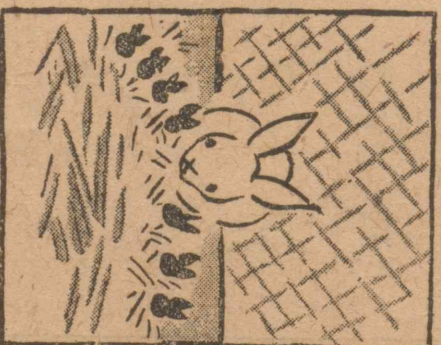
子うさぎが生まれてから、きょうで21日めです。子うさぎと母うさぎのめかたを計ってみました。母うさぎは4kg、子うさぎは、おもいで320g、かるいで260gでした。

12月2日 (日) 晴 15度

子うさぎの毛の長さを計りました。耳の長さも計りました。耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。

12月4日 (火) 晴 14度

けさみたら、母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。よいばあいに、みんな元気よくそだっているので、安心しました。



國語 第四学年上
 Approved by Ministry of Education
 (Date Nov. 17, 1947)

(昭和二十三年度用第一次発行)

昭和二十二年三月三日 翻刻発行
 昭和二十二年十二月一日 修正印刷
 昭和二十二年十一月十七日 文部省検査済
 (昭和二十二年十一月十七日)

著作権所有 著作兼発行者 文部省

兼翻刻者 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

定價金 四 錢

廣島印刷株式會社印刷製本

廷 (79)	巢 (59)	回 (48)	曲 (41)	觀 (27)	油 (18)	庭 (4)
晴 (86)	甲 (74)	郡 (48)	老 (42)	察 (27)	橋 (19)	舍 (5)
注 (91)	乙 (74)	外 (49)	戰 (43)	轉 (29)	曜 (21)	歌 (7)
暑 (94)	短 (77)	內 (49)	失 (44)	前 (35)	兄 (22)	渡 (8)
	齒 (77)	整 (50)	序 (46)	頭 (35)	砂 (23)	黃 (8)
	裁 (79)	式 (50)	縣 (46)	客 (40)	帳 (25)	卒 (9)
	判 (79)	胸 (54)	線 (46)	座 (40)	午 (26)	業 (9)
	官 (79)	宝 (55)	章 (47)	席 (40)	後 (26)	腹 (14)

広島大学図書

0130449575

